



Title	中井履軒『通語』諸注釈書小考：その特色と漢文教材としての可能性について
Author(s)	久米, 裕子
Citation	中国研究集刊. 2023, 69, p. 159-180
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/90865">https://doi.org/10.18910/90865</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 中井履軒『通語』諸注釈書小考

—その特色と漢文教材としての可能性について—

久米 裕子

はじめに

『通語』は、中井履軒(一七三二—一八一七)の早年の著述で、保元の乱から南北朝の合体までの二百六十年間の歴史が全三冊にまとめられている。

『通語』は、履軒の死後、天保年間に公刊され、やがて明治に入ると小学教科書に採択され、その副読本として『通語』の注釈書が相次いで刊行された。

本稿では、これらの注釈書を取り上げ、その特色を明らかにするとともに、『通語』が現代の漢文の教材になり得るかどうかにについて検討することを目的とする(注1)。なお『通語』が教科書に採択された時代背景等については、井上了「明治における『通語』—南朝正統論者としての中井履軒—」を参照されたい(注2)。

そこでまず『通語』の概要について確認し、次に各注釈書の具体的な注解方法について紹介し、最後に漢文教材としての可能性について述べたい。以下、原則として新字体および現代仮名遣いを用いる。ただし『通語』の諸注釈書の漢字片仮名交じり文を引用する際には、原文の体裁を示すため、旧字体

および歴史的仮名遣いととも踊り字(「ヽ」)や合略仮名(「ㄣ」)「ㄹ」(「ㄱ」)を用いる。

### 一 『通語』について

まず『通語』のテキストについて、大阪大学附属図書館懐徳堂文庫には、履軒自筆の『通語』のほか、履軒の子の中井柚園による書写本、天保一四年(一八四三)の刊本が所蔵されている。また天理大学附属天理図書館には、弘化二年(一八四五)の刊本(活字本)が所蔵されており、このほか、明治九年(一八七六)の刊本とその再版本にあたる明治一七年(一八八四)の刊本が国立国会図書館を始めとする複数の図書館に所蔵されている。天保一四年の刊本には、懐徳堂の門下生である早野橘隧による天保二年(一八三一)の「通語序」と清水中洲による天保一三年(一八四一)の「刻通語序」があり、本文には読点と返り点さらには履軒の原注が付されている。重建懐徳堂の理事兼講師を務めた西村天囚によれば、『通語』は履軒没後十五年に橘隧によって刊行されて広く流布したが、誤字が多かったため、天保一四年

に中洲によって再版された、と言う(注3)。弘化二年の刊本は、いわゆる拙修齋叢書本であり、読点や返り点および序跋の類はない。なお拙修齋叢書には、履軒だけでなく、履軒の兄の中井竹山および頼山陽や尾藤二洲の著述が多く含まれている。刊行者である中西忠蔵は、天保七年(一八三六)頃から政事に関する得がたい写本を次々と木活字で印刷したことで知られる(注4)。明治九年および明治一七年の刊本は、序文も含め、天保一四年の刊本の版式をそのまま引き継いでいる。また以上の刊本はすべて履軒の自筆本の分冊に倣い、三冊本の形態をとっている。

次に『通語』の構成について、『通語』は全十篇から成り、その篇名は、「保元語(保元の乱)」「平治語(平治の乱)」「平語上(平氏の興亡・清盛の死まで)」「平語下(平氏の興亡・平氏の滅亡まで)」「東語上(源氏三代の興亡)」「東語中(摂家将軍・宮将軍)」「東語下(北条氏の興亡)」「元弘語(元弘の乱・建武の新政の開始)」「延元語(延元の乱・建武の新政の崩壊)」「南語(南朝・南北朝の分立)」となっている(一)内は筆者注)。各篇は時代順に配列され、それぞれ戦乱や一族の興亡について、その顛末が時系列に沿って記されている。しかし、たとえば第四篇の「平語下」は平氏滅亡(一一八五)で終わっているが、これに続く第五篇の「東語上」は源頼朝の伊豆配流(一一六〇)から始まっており、時系列が前後している。そもそも平氏滅亡の歴史は源氏興隆の歴史でもあるため、「平語下」と「東語上」が取り上げている時代は大きく重なっている。これは他篇においても同様であり、山中浩之「中井履軒の思想」は『通語』は「編年体というより紀事本末体とよぶ方が適切であろう」と述べている(注5)。なお、『通語』の「く語」という篇名は、中国の歴史書である『国語』の「周語」「魯語」「齊語」といった篇名にならったもので、これが「通語」という書名の由来にもなっている(注6)。

さらに履軒が『通語』を執筆した動機について、前述の清水中洲「刻通語序」によれば、『通語』は明和の初めの作であり、当時、正史としてみるべきものが少なかつたとした上で、履軒から直接聞いた話として、国史は仁和の頃から途絶え、その後は戦乱が相継ぎ、史料は散逸してしまった。今、泰平の世になり、文教も盛んになり、多くの学者を輩出している。ただ公的に編纂されたものを聞かない。寛平以降は、歴史事実や毀誉褒貶が混沌としている。徳川光圀公の『大日本史』や林羅山の『本朝通鑑』があるが、秘蔵されて世間に流布せず、幕府に仕える者でも目にするのがないと言い、在野の民については言うまでもない。わずかに栗山潜鋒の『保建大記』や長井定宗の『本朝通紀』があるだけだが、いずれも人を満足させるものではない、としている(注7)。

宮川康子「近世後期歴史思想の変容―『日本春秋』を中心に―」は、「元禄時代以降、歴史への関心が、ひろく一般庶民の間にも高まり、そこから多くの歴史書が書かれていった」と述べ、履軒の『通語』、竹山の『逸史』、頼山陽の『日本外史』につながる民間史学のはじまりとして、禅僧、日初寂頭が著した『日本春秋』に注目している。また懷徳堂では、明和のおわりに、堀田正邦の依頼を受けて『大日本史』の書写がおこなわれ、ついで頼山陽の父の頼春水がこの懷徳堂本『大日本史』を借用して書写しているが、宮川論考は、「『大日本史』の存在が、民間知識人たちの歴史への関心をかき立てた」ことを指摘している(注8)。

最後に履軒の歴史観について、『通語』の各篇の冒頭や末尾には、「野史氏曰」として史実に対する論評が加えられており、ここに履軒の歴史観を見ることが出来る。「野史」とは、在野の人による非公式の記録のことで、「野史氏」はその作者、すなわち履軒のことである。履軒は自身の名を著述に冠することを好まなかつたことで知られるが、『通語』においては、「野史氏

曰」として自説を展開している。

前述の西村天囚は「蓋し履軒の用意は叙事よりも史論に在り……『通語』は、全く尊王斥覇の大史論なり」として、履軒の論評を絶賛している。天囚によれば、履軒は「保元語」から書き起こして、保元の乱を境にして、天下の主導権が朝廷から武家に移ったことを悲しみ、尊王斥覇の立場から、武家の統治は平清盛に始まり、源頼朝によって完成し、北条氏は源氏から政権を掠め取ったと論じている。また履軒は、元弘の乱を機に、後醍醐天皇によって天皇親政が再開されるものの、政権を保つことができなかつたことを嘆き、最後に「南語」を立て、後醍醐天皇が開いた南朝の歴史を記し、政権を回復できなかつたことを無念に思っている、とのことである(注9)。

前述の山中論考は、『通語』は保元の乱から南北朝の合体までの武家の興隆期、すなわち朝廷の衰退期を取り上げて、治乱興亡の要因を探ろうとしている、と言う。そこで履軒は、朝廷を正統としつつも、父子兄弟の秩序を乱したり、人心を失う政治をおこなつたりした場合、たとえ朝廷であつても、政権担当者としての正当性を保持できなくなり、逆に武家であつても人心を得ていけば正当性を保持できるとする。そして『通語』は、名分秩序を守っているか、仁政を行っているか、という観点から歴史を見ようとしていた、と山中論考は述べている(注10)。

なお天囚は、こうした履軒の歴史観に影響を与えた人物として、『大日本史』の編纂に従事した三宅観瀾を挙げている。観瀾は、懷徳堂初代学主である三宅石庵の弟で、南朝を正統とする立場から『中興鑑言』を著している。履軒は、南朝の正統性について言及していないものの、『通語』の中に「南語」を著し、後醍醐天皇による建武の中興が成功しなかつたことを嘆いていることから、観瀾と軌を一にしている、と天囚は言う。また観瀾は、神器説を採る『保建大記』や北朝正統説を採る『本朝通紀』とは、相反する立場に

あり、履軒が両書に対して満足できるものではないとした要因はここにある、と天囚は推測している(注11)。時野谷勝「懷徳堂の歴史観」も、観瀾の学問は「観念的・形式的な名分論にとどまらず、現実の生活に根ざした人間の実践すべき徳行を重視した」とし、履軒の歴史観が観瀾の所説と一致していることを指摘している(注12)。

## 二 『通語』の諸注釈書について

冒頭で述べたように、明治に入り、小学教科書に採用された『通語』は、明治九年(一八七六)に刊行され、さらには明治一七年(一八八四)に再刊されている。前述の井上論考によれば、『通語』は、全国的に採択されたわけではなく、自由採択制の枠組みの中で各都道府県の裁量で教科書に採択されたものであり、教科書の副読本として『通語』の各種注釈書が相次いで刊行されたのは、教科書検定制度が始まるまでの明治一五年から一七年までの間に限られている、と言う。

以下、明治の初めに刊行された諸注釈書の特色について述べる。なお井上論考が述べるように、いずれの注釈書も『通語』が小学教科書に採択されたことを受けて刊行されたものであるため、「教科書の副読本にふさわしい小冊子」であり、「内容はいずれも平易」なものであるが、各書の違いなど、もう少し詳しくみていきたい(注13)。

### ①市野靖『通語字引』全一冊、明治一五年、鬼頭平兵衛(名古屋)

序跋…境野熊「通語字引序」(明治一五年)

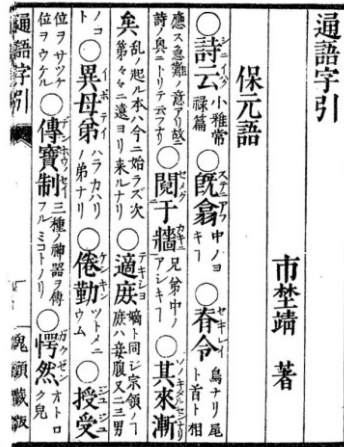
版式…每半葉八行(有界)、毎行十五字(注は小字双行)、四周单边、版

心白口、単魚尾、「通語字引」(葉数)／鬼頭蔵版」。

所蔵：国立国会図書館。

備考：

- ・『通語』の各篇から解説を要する語や文を見出しとして順次抜粋。
- ・見出しの漢語・漢文には、返り点、送り仮名、振り仮名（片仮名）。
- ・見出しの長さは、二字のものが多く、次いで三字から四字、五字を越えるものは稀。
- ・見出しの下に小字双行で注解。見出しの冒頭には白丸。
- ・注解は、漢字片仮名交じり文。固有名詞以外は、極力平易な漢字を使用。
- ・注解の長さは、小字で十字から二十字前後の簡潔なものが多い。長くても四十字前後。



市野靖『通語字引』  
国立国会図書館所蔵

『通語字引』の編者について、市野靖は、名古屋の儒学者で、字は節夫、号は天籟または無絃琴堂。尾張藩の御土居下御側組同心をへて、幕府の小納戸に取り立てられ、藩主の家従に至り、その後、愛知県師範学校の教師となる。文章に優れ、詩や書を得意としたとされ、小納戸時代には、内庫の図書を掌り、近臣の授読を兼ねた（注14）。

『通語字引』の冒頭には、勤務先である愛知県師範学校長の境野熊による明治一五年の序文を載せている。その序文によれば、市野は好学の士であり、教育における経験は広大で、特に履軒を崇拜し、その成果が『通語字引』である、としている。また市野の注解は簡明直截で、『通語』とともに並び称

せられるべきものであり、『通語』を初学者に広めた功績は非常に大きい、と言う（注15）。

その注解について、たとえば「東語下」には、「約束サシツ」、「嫌隙中ガワルクナル」、「連及マキソへ」とあり、その解説は簡潔で、長いものでも「機密莫不ニ参与」は「ナイシヤウノ大事ニサウダンシニアヅカラヌコトナシ」といった具合である。また漢字の使用も少なく、文字も大きくて見やすく、初学者向けである。『通語字引』は、のちに刊行された『通語』の注釈書と比較すると、もつともコンパクトにまとまった注釈書と言える。ただ全体の語彙数が少ないため、この注釈書だけで『通語』を読みこなすのは難しいと思われる。

② 榎田礒三郎・近藤良蔵『通語字解』全一冊、明治一五年、浅井吉兵衛（大阪）

序跋：編者「例言」（明治一五年）  
 版式：每半葉十行（有界）、毎行十八字（注は小字双行）、四周双辺、版心白口、単魚尾、「通語字解／（篇数）／（葉数）」。  
 有郭の耳格に原本の葉数（行の途中に見られる横棒は各葉の末尾を示す）。  
 所蔵：国立国会図書館。  
 備考：

- ・『通語』の各篇から解説を要する語や文を見出しとして順次抜粋。
- ・見出しの漢語・漢文には、返り点、送り仮名、振り仮名（片仮名）。
- ・見出しの長さは、二字から四字のものが多く、五字を越えるものは稀。長くても八字前後。
- ・見出しの下に小字双行で注解。
- ・人名や地名あるいは振り仮名だけで意味を了解できる語には、振り仮名だけを記して注解を付けない。

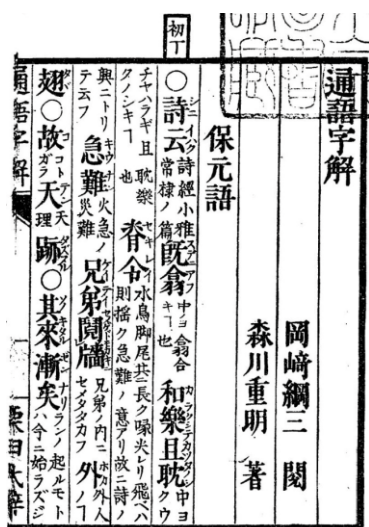


・見出しの下に小字双行で注解。

・人名や地名あるいは振り仮名だけで意味を了解できる語には、振り仮名だけを記して注解を付けない。解説がない場合は、見出しの下に白丸。

・注解は、漢字片仮名交じり文。固有名詞以外は、極力平易な漢字を使用。

・注解の長さは、小字で十字から二十字前後、長いものは四十字を越える。



森川重明『通語字解』  
国立国会図書館所蔵

この『通語字解』は、前

年に刊行された榎田・近藤の『通語字解』の同名異書

である。こちらの編者につ

いて、森川重明は、その奥

付によれば、「岐阜県土族」

とある。具体的には、尾張

藩の支藩である高須藩の

藩士で、文武館で訓導を務

めた人物である。明治一六年には、小学四級生用の教材として『大統歌注解』

を編纂している。また長野県佐久市にあった嚶々吟社の一員で、『嚶々吟社

詩』にその漢詩が掲載されている。『通語字解』の校閲をおこなった岡崎綱

三は、高須藩の藩校、日新堂の教授と文武館の教授を兼任した人物で、明治

になってからは家塾で教授した、と言う(注18)。

その注解について、森川の『通語字解』の体裁は、市野の『通語字引』に

よく似ており、コンパクトにまとまっていて、初学者向けという印象を与え

る。注解もシンプルで、たとえば「東語下」には、「私ミツ、ウ」「忌憚イ

ミハバカル」「昵シタシム」とあり、長いものでは「垂簾女ハアラハニ政

事堂ニ出ルヲ得ズ故ニ婦人ノ政ヲ聴クヲ垂簾ト云」とある。全体の語彙数は、

榎田・近藤の『通語字解』よりやや少ないが、市野の『通語字引』に比べるとかなり多い。また榎田・近藤の『通語字解』同様、「辟」「胡」「亞」など、読みだけを示して解説を加えていない語もあるが、固有名詞はあまり取り上げていない。このほか欄外に頁数を記す方式を採用している。前述の両書との関係性は不明だが、森川の『通語字解』は、両書のよいところを取り入れていると言える。

④市野靖『通語摘註』全一冊、明治一六年、鬼頭平兵衛(名古屋)序跋…市野靖「序」(明治一六年) 版式…每半葉八行(有界)、毎行十八字、四周单边、版心白口、単魚尾、「通語摘註」(葉数)。

所蔵…国立国会図書館。備考…

・『通語』の各篇から解説を要する語や文を見出しとして順次抜粋。

・見出しの漢語・漢文には、返り点、送り仮名(片仮名)。

・見出しの長さは、一字から六字前後。稀に十字を越える。長いものは「云々」として末尾を省略。

・見出しの下に見出しと同じ大きさの文字で注解。見出しの上に白丸。見出しと注解の間は一格空ける。

・注解は、漢文。返り点、送り仮名(片仮名)を付す。

・注解の長さは、数文字のものもあれば、数行にわたるものもある。

『通語摘註』は、『通語字引』を著した市野靖の手に成るもう一つの『通語』の注釈書である。『通語摘註』の冒頭には市野による明治一六年の序文を載せている。これによれば、『通語』が小学教科書に採択され、再び注目



は自身の名を著述に冠することを好まなかったが、『標註通語』の各冊の冒頭に「中井履軒著」と明記しているのは、懷徳堂の学問を顕彰しようとする森の意識のあらわれと言えよう。

『標註通語』の冒頭には菊池三溪による明治一七年の「標註通語序」および森訥による同年の「例言五項」が載せられている。菊池三溪は、名は純、字は子頭、晴雪楼主人、鉄屏書屋主人などの号をもつ。儒者の家に生まれ、和歌山藩儒となるが、藩主徳川慶福（のちの家茂）が將軍に就任した後は、將軍侍講となる。その後、退隱して、各地を転々とした。森から序文の依頼を受けたのは、大阪府中学一等教諭となった頃のことであろう（注21）。なお巻末の奥付には「原著者相続人」として中井竹山・履軒の曾孫にあたる中井木菟麿の名前も見られる（注22）。

菊池の「標註通語序」によれば、菊池は、日頃から世間で頼山陽の『日本外史』ばかりがもてはやされ、竹山の『逸史』や履軒の『通語』が顧みられない状況に不満を抱いており、森訥が『標註通語』を刊行したことを受けて、『通語』を読むことを大いに勧めている（注23）。

森の「例言五項」には、『標註通語』は、読者の便宜を図るべく、熟語の出典を探ることに精力を注いだこと、語意を明らかにするために雅俗を問わず広く諸説を集めたこと、人名・地名についての注解は欄外に記し、履軒の原註には「」を付したこと、急遽、編集に取り掛かったため、十分な校正ができず、おそらく遺漏や誤謬が多くあり、また、一度、解説した語について、繰り返し解説する手間を省いたこと、訂正すべきところが訂正されていない一方で、明らかな誤字は、一、二箇所、訂正し、あとの疑わしいものについては「恐るらくは」として訂正したこと、が述べられている（注24）。

このように『標註通語』は、『通語』の全文を掲載し、逐一、語釈と出典を記しており、全三冊というボリュームからも、同書が教科書の副読本とし

て編纂されたものではなく、前述の諸注釈書とは一線を画す本格的な注釈書であることがわかる。

「標註通語序」は『通語』が教科書に採択されたことについて言及していないが、「例言五項」に、急遽、編集に取り掛かったと書かれていることから、『標註通語』が『通語』の教科書採択に間に合わせるために、作業を急いだことがうかがわれる。また雅俗を問わず広く諸説を集めていることから、初学者の利用も視野に入れていた可能性もある。特に、同書は、上欄外に日本の人名・地名に関する簡易な注解が記されており、この点においても、読者への配慮が感じられる。

ちなみに「例言五項」にある「訂正すべきところが訂正されていない」と言うのは、「九條廢帝」という表記を指している。「九條廢帝」は、明治三年（一八七〇）に「仲恭天皇」の諡号が布告されているため、本来であれば訂正すべきであるが、履軒の表記を尊重し、あえて訂正しなかったとも考えられる。さらに「恐るらくは」の使用例としては、「東語上」に登場する「河野二郎時元」について、上欄外に「河野、恐るらくは阿野ならん」として誤りを指摘している。

その注解について、最も注目すべき点は、「例言五項」の冒頭にもあるように、やはり出典を明らかにすること力を入れている点である。たとえば「東語下」では、「版蕩」「跋扈」「爐錘」の注解において、それぞれ『詩経』の伝や『漢書』や『莊子』の注を引いたり、「垂簾」や「權數」の注解においては、後漢の鄧皇后や魏の曹操の事例を挙げたりしている。このように漢文の心得のある者にとつて、やはり典故をふまえて読むことの重要性は忽せにできない。榎田・近藤の『通語字解』の「例言」にも経伝の語はもちろん、務めて名家の注にもとづいているとあるが、教科書の副読本という制限があったためか、結果的に語釈と読みを記すだけに終わっている。市野の『通語

『通語』も出典の明記を主たる目的に掲げているが、森の『標註通語』ほどには網羅的ではない。『標註通語』は上級者向けの非常に完備された注釈書と言える。また『標註通語』は、『通語』の教科書採択を機に編纂されたと考えられるが、単なる副読本ではなく、世の中に『通語』の存在を広く知らしめることを目指したと言える。

⑥石黒磐『通語難語解』全一冊(排印本)、明治一七年、山田真武(名古屋)

(注25)

序跋…なし。

書式…每半葉十二行(無界)、毎行三十五字、四周双辺、版心白口、単魚

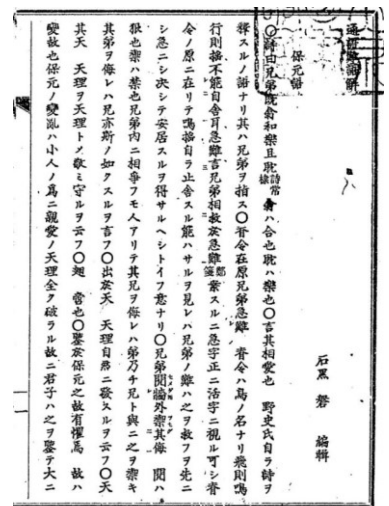
尾、版心には葉数のみを記す。

所蔵…国立国会図書館。

備考…

- ・『通語』の各篇から解説を要する語や文を見出しとして順次抜粋。
- ・見出しの漢語・漢文には、返り点・振り仮名(片仮名)・送り仮名(片仮名)の類がほとんど付されていない。
- ・見出しの長さは、一字から六字前後。稀に十字を越える。長いものは「云々」として末尾を省略。
- ・見出しの下に見出しと同じ大きさの文字で注解。見出しの上に白丸。見出しと注解の間は一格空ける。
- ・注解は、漢字片仮名交じり文(稀に振り仮名)。出典がある場合は、原文を漢文(返り点)で引用。典拠となる書名は小字双行で末尾に記す。
- ・注解の長さは、短いものは数文字、長いものは数行にわたる。

『通語難語解』の編者について、石黒磐は、愛知県の出身で、新聞記者から



石黒磐『通語難語解』  
国立国会図書館蔵

つた(注26)。「通語難語解」の刊行は、石黒が政界入りする少し前のことである(注27)。

『通語難語解』の最大の特徴は、語釈と出典の両方を載せている点である。そして語釈は漢字片仮名交じり文で、出典は漢文で表記されている。出典を明記していると言うと難易度が高い印象を与えるが、語釈の記述内容に関しては前述の副読本の類とほとんど差がない。ただ、同書は、排印本ということもあつてか、漢字の使用を控える、あるいは漢字に振り仮名を付す、といった初学者向けの配慮はほとんど見られない。また序跋の類がないため編者の意図はわからないが、同書は愛知県で刊行されており、発売人の中に、市野の『通語字引』『通語摘註』を刊行した鬼頭平兵衛や森川の『通語字解』を刊行した栗田東平の名前が見えることから、やはり初学者用の副読本として編集されたと考えられる。

その注解について、『通語難語解』は、全体として文字の大きさが小さく、また一つの注解の中に漢字仮名交じり文と漢文の二種類の表記が混在していてやや読みづらい。たとえば「東語下」に「萬機」の注解として「諸政ヲ云フ一日二日萬機傳萬機者三言其幾事之至多也書皐陶謨機幾相通ス(筆者注…「書皐陶謨」は小字双行)」とある。とは言うものの、ほかの『通語』

政治家に転身した人物である。漢学・英学・法学を学び、初め東京で家塾を開き、英学と漢学を教えていた。その後、新聞記者となり、愛知県議員、名古屋市会議員を経て、名古屋市から選出されて第一一回衆議院議員にな

の注釈書に比べて語彙数が豊富で、語釈と出典の両方を確認できるといえる。中上級者の要望にも応えられる有益な手引き書と言える。

最後に、『通語聞書』と『通語評』を取り上げる。両書は、いわゆる注釈書の類ではなく、また『通語』が教科書に採択される以前に編纂されたものであるが、参考までに『通語』関連資料として紹介する。

⑦『通語聞書』全三冊、書写本（書写者・書写年ともに不明）

序跋：なし。

書式：每半葉十行（有界）、左右双边、版心白口、単魚尾の用紙を使用。

版心には葉数のみを記す。

所蔵：国立国会図書館。

備考：

・『通語』の各篇から単語レベルではなく、まとまりのあるフレーズを見出しとして順次抜粋。

・見出しの漢文には、返り点と送り仮名を付す。必要に応じて振り仮名（片仮名）。

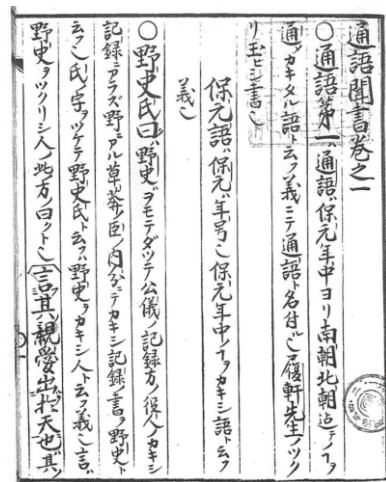
・見出しの長さは、五字から十字前後。

・見出しの下にやや小さい文字で注解。見出しの上に「」で区切り。

・注解は、漢字片仮名交じり文。必要に応じて振り仮名。

・注解の長さは、二行から三行前後のものが多い。

『通語聞書』は、『通語』の講義を口述筆記したもので、その書写者および書写年とともに不明である。国立国会図書館は、「聞書」と名の付く計十六点の資料を所蔵しており、その中には、竹山の『逸史』の講義録や四書五経に関する講義録などが含まれている。現在、一連の「聞書」諸本のマイク



『通語聞書』  
国立国会図書館所蔵

ロフィルムを複写したものが大阪大学附属図書館に「懷徳堂聞書集」として所蔵されている。

その解説を見ると、たとえば『通語聞書』の冒頭に、『通語』という書名について、「通語ハ保元年中ヨリ南朝北朝迄テノヲ通ノカキタル語ト云

フ義ニテ通語ト名付ル之履軒先生ノツクリ玉ヒシ書」とある。また篇名については、たとえば「東語上」は、「東シ關東ノ方ノ事ヲカキシ語ノ上」と述べる。さらに「野史氏曰」については、「野史ハヲモテダツテ公儀ノ記録方ノ役人ノカキシ記録ニアラズ野ニアル草莽ノ臣ノ内分ニテカキシ記録ノ書ヲ野史ト云フ之氏ノ字ヲツケテ野史氏ト云フハ野史ヲカキシ人ト云フ義之言ハ野史ヲツクリシ人ノ此ノ方ノ曰クト」と言う。

「聞書」という名のとおり、『通語聞書』は講師の口ぶりをそのまま書き留めており、たとえば「ヨウキツタリ、ヨウ、弓ヲヒイタリスル」「死ヲノガル、ハデケズ」「人ノ心ヲサメトツテ」（傍点は筆者による）のように、関西の方言と思われる表現も散見する。また簡潔を旨とする前述の諸注釈書とは異なり、その解説はくどいほどに丁寧である。たとえば「特ニ、格別ニ」「賈シ、ミツギ」「昏姻ヲ約束シテ、女子ヲヤル約束スル」など、講師が言葉を重ねて説明しているのをそのまま筆記していると思われる箇所もある。

このほか漢字の読みについて、振り仮名はあまり使用せず、その代わりに堅点を使い、熟語の右に打てば上下音読み、左に打てば上下訓読み、であることを示している。また「カラ」「所ロ」「腰シ」など、活用のない名詞に

送り仮名を付けることで、読みを示している箇所もある。このほか人名には、堅点よりも長い傍線が引かれている。

前述の『通語』の諸注釈書は、ほぼ単語レベルで解説をしているため、文全体の意味を捉えにくいことがある。たとえば「東語下」の冒頭に「北條ノ土豪也」とあるが、「土豪」という語に対しては、諸注釈書は「トコロノ家ガラ」「ソコノゴウカ」「土着之豪族也」などと解説する。一方、『通語聞書』には「北條時政ハ伊豆ノ国ノ北條ト云フ土地ノツヨク勢イアル者ノヨツテ北條ヲ以テ氏トスル」とあり、明解である。このような詳細な解説が、『通語』のほぼ全篇に及んでいる。

このように『通語聞書』は、くだけた口語的表現を使い、言葉を尽くして解説しているため、『通語』を理解する上で、きわめて有用性が高いと言える。

### ⑧猪飼敬所『通語評』全一冊、書写本（書写者・書写年ともに不明）

序跋…なし。

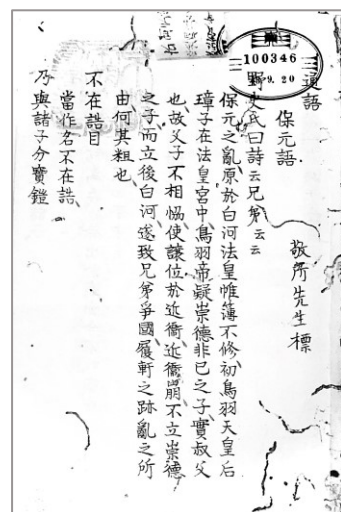
書式…白紙を使用。

所蔵…京都大学附属図書館（猪飼氏旧蔵書）（注28）。

備考…

- ・『通語』の各編から批評の対象となる句を見出しとして十字程度で抜粋。
- ・見出しの横に一格下げて「評語」。
- ・朱筆による書き込みがある（書写者は不明）。
- ・書き込みのある大きな付箋が数カ所に貼付されている（書写者は不明）。

『通語評』の編者について、猪飼敬所は、江戸後期の儒学者で、近江の人、名は彦博、字は文卿、敬所はその号である。経史に通じ、著述に『論孟考文』などがある。五十を過ぎた頃に、ようやく履軒の『雕題』を読み、若い頃に



猪飼敬所『通語評』  
京都大学附属図書館所蔵

従学しなかつたことを残念に思った、と言う。また晩年には頼山陽と親交があり、北朝正統論者の猪飼敬所と南朝正統論者である頼山陽との論争は広く知られている（注29）。

ついで、題簽には「通語評」とあるが、内題には「通語」とあり、その下に「敬所先生標」と記されている。また同書は、わずか三丁の冊子で、『通語』に対する計十二条の評語しか記されていない。あるいは『通語』の欄外に書き込まれていた敬所の書き込みを抄出したものかもしれない（注30）。

この十二条の内、五条は『通語』の表記に関する批判で、そのほかは記述内容に関する批判である。表記に関する批判としては、たとえば「保元語」の「与諸子分宝鑑」に対して、『通語評』は「当に『分宝鑑与諸子』に作るべし」としている。また記述内容に関する批判としては、たとえば同じく「保元語」の「保元の変、兄弟の相奪うに始まり、父子の相い賊うに終わる（保元の変、始於兄弟相奪、終於父子相賊）」に対して次のように述べる。

保元の乱は、白河法皇の帷薄の修まらざるに原づく。初め鳥羽天皇の后、璋子は法皇の宮中に在り。鳥羽帝、崇徳は己の子に非ずして、実は叔父ならんと疑う。故に父子、相い協わず、位を近衛に譲らしむ。近衛崩じ、崇徳の子を立てずして、後白河を立つ。遂に兄弟の争国を致す。履軒の跡乱の由る所、何ぞ其れ粗なるかな（保元之乱、原於白河法皇帷薄不修。初鳥羽天后璋子在法皇宮中。鳥羽帝疑崇徳非己之子、実叔父

也。故父子不相協、使讓位於近衛。近衛崩、不立崇徳之子、而立後白河。遂致兄弟争国、履軒之跡乱之所由何其粗也。

『通語評』は、保元の乱は、白河法皇の閨房に端を發しており、鳥羽帝と崇徳帝の複雑な親子関係に言及せず、その淵源を崇徳帝と後白河帝の兄弟の対立としている履軒の記述は粗雑であると批判している。

なお『通語評』には、本文の書写者とは別の人物によって、朱筆の書き込みと付箋の貼付がなされている。朱筆は句読と字句の訂正を示し、付箋には『通語評』の指摘を補強すべく、『通語』の原文が詳しく抄出されている。

このように『通語評』は、『通語』を読むための注釈書というよりは、『通語』を読んだ敬所の備忘録に近いと言える。

以上、『通語』の諸注釈書について、教科書の副読本としては、コンパクトでかつ語彙数が比較的豊富で、初学者に配慮された森川の『通語字解』が適しているだろう。一方、そもそも注釈書ではないため、解説が冗漫で、教科書の副読本には適していないが、『通語』の文意を理解する上では、『通語聞書』が大いに参考になる。しかし、出典を明らかにしながら読むという点では、こちらも教科書の副読本として編集されたものではないものの、やはり森の『標註通語』が最も完備しており、副読本の中では石黒の『通語難語解』が最も詳細に出典を取り上げている。

### 三 『通語』の漢文教材としての可能性について

ここまで『通語』の諸注釈書の特徴について紹介してきたが、明治の教育現場において『通語』を使ってどのような授業が行われていたのか、各種注釈書がどこまで活用されたのかはわからない。しかし、ここで注目したい点は、

当時の人々が一定の教育的効果を見込んで『通語』を教科書に採択した点であり、また、漢文の素養がある人々が、『通語』の教科書採択を歓迎し、なんとかして『通語』を読んでもらいたいと考え、工夫を凝らした副読本を何種類も世に送り出したという点である。

このことをふまえ、教科書としての評価が高い『通語』を現在の大学の授業において漢文の教材に用いることはできないか考えてみたい。そこで以下、『通語』を使用することで得られるであろう教育的効果を四点挙げる。なお、今回は、『通語』全十篇中、かなりの紙幅を割いている「東語」、すなわち鎌倉幕府に関する記述に注目して議論を進めたい。そして底本としては、広く流布している明治一七年の刊本を用いる。

第一に、初学者が漢文の語法を身につけ、漢文に慣れるという意味において、『通語』は好教材であると考えられる。

まず『通語』は、全文に読点と返り点が付され、さらに人名や地名に関する履軒の短い注解が所々にあり、初学者の教材として、最低限の条件を満たしていると言える(注31)。

次に『通語』の記述は、簡潔を旨とし、一つ一つの文が短く、文の構造もシンプルである。そのため返り点としては、ほぼレ点と一二点しか使用されておらず、上下点の使用は稀であり、漢文に不慣れた学生でも比較的容易に書き下し文を作ることができるであろう。

さらに『通語』は、歴史的経緯が年表のように簡潔に記されているところがあり、そこは話の流れも追いやすい。たとえば將軍頼経の解職から宝治合戦に至るまでの経緯について、「東語下」に次のように淡々と述べられている。

寛元二年四月、頼経、災異を以て職を解く。経時、其の子頼嗣を立つ。四年四月、経時、卒す。弟の時頼、襲ぐ。五月、越後の守光時、難を作

すを謀る。発覚して伊豆に流す。七月、前將軍の頼経、京師に還る。宝治元年夏、時頼、三浦若狭守泰村を殺す（寛元二年四月、頼経、以災異解職。経時立其子頼嗣。四年四月、経時卒す。弟時頼襲焉。五月、越後守光時謀作難。発覚流于伊豆。七月、前將軍頼経還京師。寛治元年夏（筆者注…「宝治元年夏」の誤り）、時頼殺三浦若狭守泰村）。

そして『通語』は漢文で書かれた日本の歴史書であるため、学生は本文中の人名や地名さらには文化的背景に対して、中国の歴史書よりなじみがあり、純粋に漢文を読み解くことに集中できるのではないだろうか。ちなみに筆者は、中国語の講読授業において、日本の文化を現代中国語で紹介する文章を導入教材に取り入れており、これにより学生は中国語の文法理解に専念できているという手応えを得ている。

第二に、『通語』には、今の中学・高校の歴史教科書には登場しないエピソードが散見し、内容的にバラエティに富んでいる。たとえば『通語』は前述のような簡潔な描写が続く箇所もあるが、権力闘争の歴史を軸に、歴史的事件の背景やその周辺事情にも触れられており、読者の興味をそそる内容になっている。たとえば源頼朝と北条政子が結婚に至るまでの経緯について、「東語下」に次のようにある。

頼朝の伊豆に配され、伊東祐親に依る。祐親、害心有り。頼朝、遁れて北条に奔り、時政の家に投ず。既にして時政、更を以て京師を衛り、還る。目代の兼隆と偕にし、途に在りて昏を約す。至るに及びて、其の女と頼朝と私するを聞く。大いに駭き、辜を獲るを懼れ、伴として知らざるものと為し、遂に之を嫁がす。女、宵に遁れて頼朝に奔る。時政、之を奈何ともするなし（頼朝之配于伊豆、依伊東祐親。祐親有害心。頼

朝遁奔北条、投時政家。既而時政以更衛京師、還。与目代兼隆偕、在途約昏。及至、聞其女与頼朝私。大駭、懼獲辜也。伴為不知者、遂嫁之。女宵遁奔頼朝。時政無奈之何也）。

なお「東語上」によれば、頼朝は、祐親のところにいた時にも祐親の娘と密通し、子供までもうけており、それを知った祐親は娘をよそに嫁がせて、頼朝との子供を殺している。このほか政子が頼朝の愛妾である亀の前の住まいを破壊した後妻打ちの話や、後鳥羽上皇の愛妾である伊賀局の領地をめぐる朝廷と幕府が対立した話なども見られる。このあたりについて、履軒の論評は見られないが、取り上げられているのが君臣関係や父子関係だけではないのが興味深い。

このほか『通語』には、義経伝説のような俗説の類も取り上げられている。「東語上」に次のようにある。

義経、妻子と自ら焚死す。時に暑に属して途遼ければ、焼爛腐壞して、識別すべからず。蓋し其の実、家属を率いて肅慎に入る。夷中に長たり、寿を以て終わる。国中に義経及び弁慶の祠有りて、今猶お存す。肅慎の酋長、自ら源豫州の裔と謂う有りと云う（義経与妻子、自焚死。時属暑而途遼、焼爛腐壞、不可識別也。蓋其実率家属入肅慎。長於夷中、以寿終。国中有義経及弁慶祠、今猶存焉。肅慎酋長、有自謂源豫州裔云）。

なお義経がモンゴルに渡って族長となったという話について、前述の猪飼敬所は、俗に義経が蝦夷に渡ったという話は聞くが、中国にわたり、族長に義経の子孫がいるという話は聞いたことがないと批判している。また『日本外史』は、ある人が「義経は蝦夷に逃れた」と言ったが、頼朝は真相を追

求しなかったと記している(注32)。

さらに『通語』は、歴史上の人物の人となりにも触れていて、「東語下」に、頼朝は「性、猜忌多く、独り時政のみ親信す(性多猜忌、而独親信時政)」とし、北条泰時は「友愛慈良、躬ら儉勤を執る。……廉平和寛、誠を推して物を愛し、其の民を視るや惻怛の意有り。上下悦服し、乃ち四海少康に至る(友愛慈良、躬執儉勤……廉平和寛、推誠愛物、其視民有惻怛意。上下悦服、至乃四海少康)」と評している。『通語』の泰時に対する評価は非常に高く、北条氏が八世代にわたって権勢を誇ったのは、「泰時の力なり(泰時之力也)」としている。

そして泰時について評価が高いのが、五代執権の北条時頼で、『通語』は時頼について「廉平寡欲、治道に潜心す。政事、泰時に亜ぐ(廉平寡欲、潜心治道。政事亜泰時)」と評している。そして時頼の功績として、時頼自身(身の善政ではなく、時頼が抜擢した青砥藤綱という人物の善行を挙げている点)が関心を引く。藤綱の裁判が相手の身分のとらわれず公平であったこと、夜、水に落とした十文を拾うために数十文の松明を買ったこと、時頼が神のお告げを受けて藤綱に土地を与えようとしたのを藤綱が拒んだこと、といった真偽不明のエピソードがかなりの紙幅を割いて記されている。ちなみに青砥藤綱の話は、『日本外史』にも似たような文脈の中で採用されている(注33)。

第三に、『通語』は、単に政権の推移を記すだけでなく、現在の学校教育とは異なる歴史観を有している。このような歴史の見方を知ることが、学生にとって大きな学びとなるだろう。

すでに述べたように、『通語』は、歴史叙述の合間に、時の為政者が名分秩序を守っているか、人心を得ているか、という観点から評論が書かれている。たとえば、頼朝と平清盛の二人に対する評価について、「東語上」に次のようにある。

野史氏曰く……世俗、喜んで称す頼朝の義を挙げ暴を誅すと。進みては王愾を攘い、退きては不天の仇に報ゆ。忠孝並挙し、仁知兼完す。吁豈に其れ然らん。吾請う其の本を提げ、其の源を究めん。夫れ義朝は反賊なり。平氏に微<sup>か</sup>ずと雖も安<sup>やす</sup>くに適<sup>あた</sup>き死<sup>し</sup>を<sup>た</sup>追<sup>お</sup>れん。平氏は天子の為に寇を禦<sup>まも</sup>り、安<sup>やす</sup>くんぞ之を仇とするを得ん。假<sup>た</sup>令<sup>し</sup>清盛不幸にして平治応保の際に歿すれば、勲<sup>いさ</sup>勞<sup>らう</sup>山の如く、復<sup>た</sup>た疵<sup>あ</sup>瑕<sup>い</sup>の議<sup>ぎ</sup>すべき無し(野史氏曰……世俗喜称頼朝挙義誅暴。進攘王愾、退報不天之仇。忠孝並挙、仁知兼完。吁豈其然乎。吾請提其本、而究其源。夫義朝反賊也。雖假平氏安適遣死。平氏者為天子禦寇、而安得之仇。假令清盛不幸歿於平治応保之際、勲勞如山、無復疵瑕可議已)。

頼朝は朝敵であり父の敵でもある平氏を討ったとして世間は称賛するが、先の平治の乱において、頼朝の父である義朝は賊臣であり、清盛は天皇のためにこれを防いだに過ぎない。かりに清盛が平治から応保にかけて亡くなっていれば、その功績は山のごとく立派で、なんの瑕疵もなかったであろう、と述べている。

もちろん、頼朝の功績についても、認めるところはあり、「東語上」に、頼朝を息子の頼家と比較して、次のように述べている。

野史氏曰く、嗚呼創業と守成と孰れか易く孰れか難き。創業の難きこと天に登るのごとく、守成の易きこと、地に坐るのごとし(野史氏曰、嗚呼創業与守成、孰易孰難。創業之難、若登天、守成易、若坐地)。

ここでは創業がいかに難しいかが記されている。しかし『通語』は、この

あとに、義朝・頼朝父子がいかに多くの同族を殺害したかを書き連ね、源氏の骨肉の争いの凄まじさを示し、源氏将軍が三代しか続かなかつた要因をここに求めている(注34)。

さらに北条氏については、「東語下」に次のように述べて批判している。

野史氏曰く、北条氏は智数権力を以て国柄を竊む。其の嶮謀譎詐、端緒多しと雖も、之を要するに人心を収むるを以て帰と為す。故に税斂を薄くして冗費を省き、躬<sup>みづか</sup>ら儉素にして、貧窮を賑わすは、仁に似たり。

八世の間、爵は五品を踰えず、官は州牧に出でず、胥<sup>あ</sup>い率いて幕府に臣節を執るは、恭に似たり。北条氏敢て自ら尊大にせざるも、威権の在る所なれば、人自ら其の腰の折れ、膝の屈するを知らず。諸将牧守は、皆其の等儕なり。爵位の或いは之に上なる者も、其の交際は則ち翻りて有君臣のごとき者有り。是においてか、承久の役、諸将異志無く争いて之が為に死を効し、之を名づけて忠と曰い、自ら其の逆を助くるの非義を知らず。承久以降、益ます甚しと為す(野史氏曰、北条氏以智数権力竊国柄。其嶮謀譎詐、雖多端緒、要之以収人心為帰。故薄税斂省冗費(筆者注…「尤」は「冗」の誤り)、躬儉素、賑貧窮、似仁也。八世之間、爵不踰五品、官不出州牧、胥率執臣節于幕府、似恭也。北条氏不敢自尊大、而威権所在、人不自知其腰之折、而膝之屈。諸将牧守、皆其等儕、而爵位或上之者、其交際則翻有若君臣者。於是乎承久之役、諸将無異志、争為之效死、名之曰忠、而不自知其助逆之非義也。承久以降、為益甚)。

北条氏は権謀術数によって政権を奪ったが、履軒が重視するところの人心を得たため、政権を維持することができたのである。質素儉約に努め、貧しい者に施しを与えるのは仁に近く、官位栄達を求めず、幕府に対して臣下の

礼を取るのには恭に近い。しかし、その結果、身分の高い者も低い者も北条氏に媚びへつらい、承久の乱では、こぞって逆賊を助けるという結果になってしまった。

すでに述べたように、北条氏の中では、泰時と時頼に対する履軒の評価は高いが、第八代執権の北条時宗に対する評価はどうであろうか。時宗は、元朝から日本を守った勇ましい人物として描かれることがあるが、『通語』では、文永・弘安の役において時宗が主体的に動いた記録はない。文永の役に関しては、「東語下」に次のようにある。

〔文永〕十年秋、元、使いを遣り来る。納れず(十年秋、元遣使来。弗納)。

弘安の役に関しては、一国の使者に対して、何の対応もせず、挙げ句の果てには使者を殺害するという暴挙に及んでいることが記されている。

建治元年春、元、使いを遣り来る。報ぜず。冬、始めて筑紫探題を置く。二年春、元、復た使いを遣り来る。捕らえて之を梟す。弘安三年春、復た来るも、亦た之を殺す(建治元年春、元遣使来。弗報。冬、始置筑紫探題。二年春、元復遣使来。捕梟之。弘安三年春、復来、亦殺之)。

時宗が主体的に行ったこととして、『通語』は、宗尊親王を廃して惟康親王を立てたこと、異母兄の北条時輔を殺害したこと、そして後嵯峨上皇の遺言といつわって、龜山天皇と後深草上皇の子孫が代々交互に天子の位を受け継ぐように内外に布告したことを挙げている。『通語』は時宗を名指して批判はしていないが、『通語』に採用された時宗の事跡からみて、時宗を好ま

しい人物として捉えていたとは考えにくい。特に両党迭立に大きく関わった点は見逃せないであろう。『通語』によれば、北条氏は、この遺言捏造と五摂家分立によって、天皇家と関白家の両方から人事権を奪い、その結果、人々は北条氏にこびへつらうようになり、朝廷はまるで旅宿のように人が入れ替わり立ち替わり位に就くといった有様であった、と言う。

なお『日本外史』には、後嵯峨上皇の遺言の話は採用されず、時宗は武芸にすぐれ、剛毅な性格であったエピソードが付け加えられ、元朝に対しては、無礼な書簡に対する返信を拒み、元朝が二度とわが国を侵略しなかったのは「時宗の力なり」とし、『通語』とは立場を異にしている(注35)。

第四に、『通語』には、語釈や出典を載せた各種注釈書があり、『通語』を読む上で、これらを有効活用することができる。『通語』の文体について、前述の井上論考は「簡要達意だが、達意の漢文とは決して平易なのではない。むしろ典故をふまえた面倒なもので、初学者が読むには相応の間を要す」と述べているが(注36)、まさに典故をふまえた文体であることが『通語』の特色であり、これを抜きに語ることはできない。すでに述べたように、『通語』の諸注釈書は、当初は簡単な語釈を記すだけのものだったが、その後、出典のある語を取り上げるようになっていったことから、当時の人々の出典に対するこだわりが感じられる。

たとえば「東語下」の冒頭に、「後鳥羽上皇、王室版蕩の後を承く(後鳥羽上皇、承王室版蕩後)」とあり、「版蕩」という語について、市野『通語字引』は「アレミダレル」、櫛田・近藤の『通語字解』は「チョウテイノフトロヘヨクナル」と、森川の『通語字解』は「アレミダレル」とするが、市野の『通語摘註』は「詩大雅。上帝版版<sup>タリ</sup>蕩々<sup>タル</sup>上帝。註<sup>ニ</sup>版版<sup>ハ</sup>反也蕩々<sup>ハ</sup>法度廢壞也」と、森の『標注通語』は「詩大雅、上帝版版、又蕩蕩上帝、傳、版版反也、蕩蕩法度廢壞貌、則謂<sup>ニ</sup>王室衰弱<sup>一</sup>也」と、石黒の『通語難語

解』は「王室ノ衰弱ヲ云フ上帝版々又タ蕩々上帝傳版々反也蕩々法度廢壞也 詩大雅(筆者注…「詩大雅」は小字双行)」と出典を明記している。

本来であれば、漢文を読む際には、自身で出典を調べる必要があるが、すでに出典をおさえた注釈書が存在するのであれば、それを利用しない手はない。これは何も『通語』に限ったことではないが、漢文には古典の言葉がちりばめられており、また出典を確認することでさまざまな古典に触れるよい機会になる。学生は、漢文は単に漢字で書かれた文章というだけでなく、深みや広がりをもつ文章であることを知ることができるだろう。

#### おわりに

まず第一章において『通語』は、明治に入って小学教科書に採用されただけでなく、江戸時代においてすでに定評があったことを述べた。履軒は、自身の著述をごく限られた人にだけ閲覧を許し、その著述が生前に公刊されることはなかった。そして、その死後、初めて刊行されたのが『通語』であった。また中西忠蔵は入手刊行が難しい写本の類を出版していたが、すでに公刊されている『通語』をあらたに活字本で刊行しているのは、その需要があったためであろう。当時、人々の歴史への関心が高まる中、履軒は満足いく歴史書を著そうとしたのだが、その歴史観について、前述の山中論考は「道徳的・名分的立場に立つものであり、儒者の歴史観としてとくに独自であるとはいえないかもしれない」と述べる。しかし、これは『通語』は履軒の早年の作であり、のちの熟成した史論と比べての話であり、換言すれば、『通語』には非常に標準的な儒者の歴史観が展開されていると言うことができ。そして、それは決して独りよがりなものではなく、三宅観瀾の系譜に属し、山中論考によれば、頼春水『在津紀事』は「通語は実に快編なり」と称

し、『通語』が寛政の三博士の一人で、国史に詳しい尾藤二洲によつて論定されていることを記している(注37)。

次に第二章において明治の初めのわずか数年の間に『通語』の諸注釈書が立て続けに刊行され、そこに漢文の素養のある多くの人が尽力したことを述べた。また各編者が互いの著述をどこまで参考にしたかは不明であるが、初めは簡便にまとめられた語釈の類が、それだけでは飽き足りず、徐々に難易度を増し、その出典にまで言及する注釈書が刊行されたことも明らかになった。たとえ初学者向けの教材であっても、漢文を読む上で出典を明らかにすることが重要であらためて確認されたと言える。そして『通語』が小学教科書に採用された要因として、二百六十年の歴史が簡潔にまとめられていること、当時、一般的であった南朝中心史観にもとづいていたことなどがあげられるが、諸注釈書の序文などから、当時『通語』は根強い人気があったことがうかがわれる。

最後に第三章において『通語』の漢文教材としての四つの教育的効果について述べた。大学の一般教養科目など、漢文を専門としない学生を対象に中国の古典について講義する場合、中国古典の魅力について教えることが第一に求められる。そこで中国の古典を完全に退けてまで、『通語』を漢文教材として用いるというのは、非現実的かもしれない。

しかし教員の解説や訳注書の現代語訳によつて、その内容を理解するだけでなく、学生自身が「自分で読み解いた」という実感を得ることも重要であると筆者は考える。特に「訓読する」という経験を通じて、漢文を日本語化する醍醐味を学生にはぜひとも味わってほしい。現在、SNS等で「漢文不要論」が話題になるなど、若い世代の漢文離れが深刻になっている。中国学を専攻する学生であれば、漢文を読む機会はふんだんにあるだろうが、それ以外の学生に対して、「漢文を読む」機会を少しでも提供することは、非常

に意味があるだろう。もし漢文で書かれた文献を取り上げる授業があれば、その内の数回だけでも、あるいは事前事後学習の課題として、『通語』を教材として取り上げてみてはどうだろうか。そして、その際には、『通語』の注釈書の編者たちがこだわった典故のある表現にも注目し、漢文がもつ深みと広がりについて教えることもまた重要であろう。

本稿において、本来であれば、『通語』を同時代の歴史書と比較検討した上で、議論を始めるべきだったかもしれない。しかし、すでに述べたように、本稿は『通語』が定評ある歴史書として小学教科書に採択されたことを前提に議論を進めた。繰り返しになるが、『通語』は、多彩なエピソードに富む日本の歴史書であり、典故をふまえた簡潔な表現によつて、確固たる歴史観を提示している。加えて、その難しい語句や出典について解説する諸注釈書が存在することを考慮に入れると、『通語』は、うつつけの漢文教材と言えるのではなからうか。なお、実際に『通語』を教材として活用し、その教育的効果や『通語』の諸注釈書の有用性を確認することは、今後の課題としたい。

## 注

(1) 本稿は、小島教「大義名分論が創りあげた英雄—文天祥と北条時宗—」のコメントーターを務めた平成一九年(二〇〇七)の「にんぷろワークショップ二〇〇七」および「中井履軒の『通語』について」を発表した平成二七年(二〇一五)の「懷徳堂研究会」にて得られた知見をふまえている。

(2) 井上了「明治における『通語』—南朝正統論者としての中井履軒—」、「懷徳」第八五号、二〇一七年、七二〜八〇頁を参照。

(3) 西村天囚「履軒の史論」、復刻版『懷徳堂考』下巻、懷徳堂・友の会、昭和五九年、八〇〜八一頁を参照。出版に至った経緯については、清水中洲「刻通語序」には「宜なるかな當時是の書出でて、人争いて伝誦し、今や其の伝滋ます広し。而れども坊間に伝わる所の本、魯魚の謬り、頗る多し。或いは人に疑わるるに至る。門下の徒の之を聞くや、豈に容舎して顧みざらん。因りて相い互に校讎し、以て命じて割刷せしむ(宜乎當時是書出。而人争伝誦。今也其伝滋広。而坊間所新之本。魯魚之謬。頗多。或至取人疑。門下之徒之聞之。豈容舎而不顧乎。因相与校讎。以命割刷)とある。

(4) 多治比郁夫「拙修齋叢書の刊行者」、『図書館界』二巻二号、一九六九年、四二〜四六頁を参照。多治比論考によれば、中西忠蔵の経歴については、不明な点が多いが、広く名士と交流があり、特に尾藤二洲と親密な関係であったとし、履軒や竹山、そして頼山陽の著述は尾藤二洲を通じて入手したのであろう、と述べている。

(5) 山中浩之「中井履軒の思想」、『中井竹山・中井履軒』(叢書・日本の思想家24)、明徳出版社、昭和五五年、二六三頁を参照。山中論考は、履軒の歴史思想として、『通語』だけでなく、『弊帚統編』や『弁妄』についても言及している。

(6) 清水中洲「刻通語序」には「其の書を為すや、当時の史乗に就きて、以て篇目を立て、因りて係ぐに「語」を以てし、名づけて曰く「通語」と。蓋し『左氏外伝』に倣うと云う(其為書。就當時史乗。以立篇目。因係以語。名曰通語。蓋倣左氏外伝云)とある。

(7) 清水中洲「刻通語序」には「吾聞く、翁の嘗て謂うこと有るを。国史、仁和に絶業す。其の後、喪乱相い接ぎ、冠裳変じて介冑と為り、秘府煨燼して、伝紀散佚す。右文の政、熄ぶに殆し。方に今幸にして清泰の運りに遇い、海内に事無きこと、二百年の今におけるや、文教漸く興り、諸儒輩出し、道徳文章、多くは往事に譲らず。唯だ柱下の撰、未だ之を或いは聞かず。乃ち寛平以下百十年を救うるに、其の興廢治乱の跡と、夫の忠姦邪正の事と、混淆錯乱す。一に諸を閭里の伝誦に付すも、之

を敢えて断ずる莫し。嘗て聞く源義公『日本史』を撰し、林祭酒『本朝通鑑』を撰すと。然れども其の書秘して伝わらず。朝の士大夫と雖も、蓋し寓目するを得る莫からんと云う。況んや草茅の民をや。今伝うる所、僅に栗山氏の『保建大記』、長井氏の『本朝通紀』のみ。然れども未だ人心を厭厭せず、豈に慨嘆せざらんや、と。是れ翁の斯の撰有る所以なり(吾聞翁嘗有謂。国史絶業于仁和。其後喪乱相接。冠裳変為介冑。秘府煨燼。伝紀散佚。右文之政。殆乎熄。方今幸遇清泰之運。海内無事。二百年于今。文教漸興。諸儒輩出。道徳文章。不多譲於往事。唯柱下之撰。未之或聞也。乃寛平以下数百年。其興廢治乱之跡。与夫忠姦邪正之事。混淆錯乱。一付諸閭里伝誦。而莫之敢断也。嘗聞。源義公撰日本史(筆者注:「源」の上は欠字)。林祭酒撰本朝通鑑。然其書秘而不伝。雖朝士大夫。蓋莫得寓目焉云。況草茅之民乎。今所伝。僅有栗山氏保建大記。長井氏本朝通記而已。然未厭厭人心。豈不慨嘆乎。是翁之所以有斯撰也)とある。

(8) 宮川康子「近世後期歴史思想の変容―『日本春秋』を中心に―」、『京都産業大学日本文化研究所紀要』第九号、二〇〇四年、七七〜一〇一頁を参照。

(9) 西村天囚「履軒の史論」(前掲)、八一〜八二頁を参照。

(10) 山中浩之「中井履軒の思想」(前掲)、二六三〜二六七頁を参照。

(11) 西村天囚「履軒の史論」(前掲)、八三頁を参照。また天囚は、三宅観瀾と懷徳堂の関係について、三宅観瀾が三宅石庵(懷徳堂初代学主)の弟であることに加え、その主著『中興鑑言』は甥の三宅春楼(第三代学主)によって刊行されていること、竹山・履軒兄弟の父である中井整庵(第二代学主)とも親しい間柄であったこと、を挙げている。

(12) 時野谷勝「懷徳堂の歴史観」、『季刊日本思想史』第二〇号、一九八三年、四二頁を参照。時野谷論考は、竹山の『逸史』と履軒の『通語』を取り上げ、いずれの歴史観も大阪の現実の庶民生活に裏付けられたものであると結論づけている。

(13) 井上了「明治における『通語』―南朝正統論者としての中井履軒―」(前掲)、

七三〜七五頁を参照。

(14) 名古屋市役所編『名古屋市史(人物編二)』、川瀬書店、一九三四年、三五四〜三五五頁を参照。

(15) 境野熊「通語字引序」には「吾が友、市野天籟子は、徳行の士なり。夙に学を好み、勢利名声藉甚に恬たり。今、吾と同じ学職に在り、其の教育における経歴は、広く、大なり。而して翁の文を愛し、翁の志を慕い、自著の『通語字引』は、其の崇尚継述する所以の者にして、誠に至れり。其の解の如きは、則ち直截にして簡明。蓋し翁と並び称して、不朽とすべし。而して其の末を明らかにするの功、或いは倍蓰す(吾友市野天籟子、徳行之士也。夙好学、恬于勢利名声藉甚、今与吾同在学職、其経歴于教育也、広矣、大矣。而愛翁之文、慕翁之志、自著「通語字引」、其所以崇尚継述者、誠に至矣。如其解、則直截而簡明。蓋可与翁並稱、而不朽也。而明其末之功或倍蓰焉) (句読点は筆者による)」とある。

(16) 榎田礪三郎について、長崎県立長崎図書館郷土課の山口氏にご教示いただいたところ、当時の「長崎県職員録」に榎田礪三郎の名前はなく、長崎県教育会『長崎県教育史(復刻版)下巻』(臨川書店、一九五七年、七六頁)に、明治二八年小学校教科用図書審査委員として任命された中に、近藤良蔵とともに「長崎県女児小学校校訓導 榎田祐三」という名が挙がっているが、榎田礪三郎との関係は不明である。近藤良蔵について、詳しくは、平田宗史「小学督業巡視功程書に関する若干の考察―長崎県庁文書を中心として―」『福岡教育大学紀要(教職科編)』第二二号、一九七一年、八五〜九八頁を参照。なお近藤良蔵が増補改訂に関わった『改正長崎県地理小誌字引』の封面裏には「長崎師範学校編輯」とあり、その刊記からも同書が長崎で刊行されていることがわかる。これに対して『通語字解』は、明治九年および明治一七七年に『通語』を刊行した大阪の浅井吉兵衛のところで刊行されているが、その経緯については不明である。

(17) 編者「例言」には「一、通語三巻小学教科書トナルニ及テ生徒始メテ漢文ヲ読ミ

漢文ヲ解セサルヲ得サルニ至レリ。其艱苦想フベシ。此ニ於テカ苟モ読ミ難ク解シ易カラサル者ハ、逐次音訓解釈ヲ附シ欄外掲クルニ枚数ヲ以テシ、敢テ偏ヲ索メ旁ヲ搜ルノ煩ヲ去リ、以テ原本ノ对照ニ便ス。一、原書ノ前後ニ散見スル姓名熟語等、前二記シテ後ニ載セサル者アリト雖ト或ハ重複互出。且ツ熟字動詞ノ如キ上下文意ノ関係ニヨリ解釈訓点亦多少ノ異同ナキニアラス。一、経伝ノ語ハ勿論其他務メテ名家ノ注解ニ就テ其要旨ヲ掲クト雖モ畢竟小学生徒ノ備忘録ナレバ、敢テ大方君子ノ高覧ニ供ス可キ者ニアラス。故ニ雅俗ヲ問ハス野鄙ヲ論セス加之。倉卒ノ編纂ニ係リ果テ誤謬ナキヲ保セス。看者乞フ恕セヨ(句読点は筆者による)」とある。

(18) 大野正茂『高須藩人物略誌(改訂)』、松風園文庫、二〇一五年を参照。参考までに述べると、森川の父の篤蔵は日新堂の「講授並堂中諸事縮筋」で、維新後には家塾にて師弟の教育に当たった。藩校の跡地は、現在、海津市立高須小学校となっている。森川が編纂した『大統歌注解』は、水野忠邦に任せ、のちに昌平黌の教授となった塩谷世弘『大統歌』に対する注解で、『大統歌注解』の封面裏に「尾張知多郡野間学校蔵板」とあり、当時、森川は同校の校長であった、と言う(現在は美浜町立野間小学校)。嚶々吟社については、『嚶々吟社詩』の序文によれば、長野県佐久郡にあつた詩社で、毎月詩作の会合を開いて切磋琢磨し、漢詩人として著名な大沼枕山がその添削に当たっていた。会合が百回を越えたところで明治二一年に『嚶々吟社詩』を刊行し、枕山に序文と点校を依頼した、と言う。前述の大野正茂氏が運営するブログ「松風園文庫・高須藩への招待」は、高須藩に関する情報を発信しており、たとえば高須藩関係者の著作物として、森川の『大統歌注解』や『通語字解』、さらには『嚶々吟社詩』に掲載されている森川の漢詩を紹介している。  
(<https://ameblo.jp/syoutenbunko/>、二〇二二年一月一九日閲覧)。

(19) 市野靖「序」には、『通語』は「小学教科の改訂の際、書目中に採入し、以て再び天日を見る者なり。然れども小学の徒の其の習読辨解に苦しむ者往々にして有り。是を以て灯火を採り筆を執りて『通語字引』を著し、以て童子に授く。今又た書卷中

の典故・字義の難解なる者を掲げ、取ること三百餘語。皆其の本書に就きて、之を訂すに一として己が意を附さず。冀わくは小学の徒の是によりて講習を為せば則ち或は一便を得ることを。是れ余の一片の婆心なり。識者屑々として瑣末なるを咎むる勿れ（小学教科之改訂之際、採入書目中。以再見天日者。然小学之徒苦其習読辨解者往々有焉。是以采灯火執筆著通語字引、以授童子。今又掲書卷中典故字義難解者、取三百餘語。皆就其本書、而訂之一不附己意。冀小学之徒由是為講習則或得一便。是余一片婆心也。識者勿咎屑々於瑣末焉）（句読点は筆者による）」とある。

(20) 中井終子「安政以後の大阪学校」、『懷徳』第九号、一九三一年、五六―一〇一頁を参照。

(21) 福井辰彦「ある儒者の幕末―菊池三溪伝小攷―」、『論究日本文学』第八九号、二〇〇八年、一―一三頁を参照。

(22) 明治一四年に木菟麻呂の父である中井桐園（中井修治）は亡くなっているが、『標注通語』と同じ明治一七年に、浅井吉兵衛のところから刊行された『通語』の「著者相続人」は、明治九年の刊記をそのまま引き継いで「中井修二」となっている。

(23) 菊池三溪「標註通語序」には「『逸史』『通語』『外史』におけるや、議論見解、及ばざる有るか。曰く少しも遜らず。事実引証、及ばざる有るか。曰く少しも遜らず。筆力縦横、及ばざる有るか。曰く少しも遜らず。人或いは『逸史』を誹議して、以て『左氏』を模倣すと為す。之を要するに良木の寸朽、照乗の微痕、二卵を以て干城を弃つるは、則ち識者の取らざる所なり。然り而して『外史』一たび出づれば、世を挙げて喧伝し、家ごとに購い戸ごとに蔵め、黄口青衿より以て武人俗吏に至るまで、其の稍に書を読み字を解する者は、動もすれば『外史』『外史』と曰い、洛紙之が為に翔貴するに至る。是において『逸史』擯斥せられ、啻だに秋後の素紙なるのみならず、而して況んや『通語』におけるをや。予、居常より人と語りて前史に及び、未だ嘗て其の用舎行蔵の『春秋三伝』と其の帰を同じくするを歎かずんばあらず。頃者、森君士敏、『標註通語』なる者を梓して之を行わんと欲し、

予をして之が為に前茅せしむ。予、蚤に中井氏の為に左祖する者なれば、乃ち往昔の蓄う所を吐露し、以て此の書を読むを諒げる者なり（逸史通語於外史。議論見解有不及邪。曰く不少遜也。事実引証。有不及邪。曰く不少遜也。筆力縦横。有不及邪。曰く不少遜也。人或誹議逸史。以為模倣左氏。要之良木寸朽。照乗微痕。以二卵弃干城。則識者所不取也。然而外史一出。举世喧伝。家購戸蔵。黄口青衿。以武人俗吏。其稍読書解字者。動曰外史外史。至洛紙為之翔貴。於是逸史擯斥。不啻秋後素紙。而況於通語乎。予居常與人語及前史。未嘗不歎其用舎行蔵。与春秋三伝同其帰也。頃者森君士敏。欲梓標註通語者行之。使予為之前茅。予蚤為中井氏左祖者（筆者注：「蚤」は「蚤」の誤りか）。乃吐露往昔所畜。以諗読此書者）」とある。

(24) 森訥「例言五項」には「一、本書は中井履軒翁の選する所、今、之に註し題して曰く「標註通語」と。務めて熟語の出拠を探り、以て文意の存する所を詳らかにし、聊か読者をして繙閱の便を得しめんと欲す。是れ後学の予の微衷なり。一、諸儒先輩の説を引証し、又た傍らに野乘の陋語と雖も、苟も参考にするに足る者は、則ち網羅輯収し、以て博く語意を覈べんと欲す。此予の宿志と為す所なり。一、人名及び地名を欄外に載せ、又た注釈の小括弧を施す者は原註為り。新旧を別つ所以なり。一、予の此の書に従事するや、率爾として業を起こす。未だ潜心讎校するに遑あらず。恐るらくは遺漏誤謬も亦た多からん。又た前に解有る者は後に之を略す。読者、諒とせられよ。一、本書、訂正を加うべき者有り。然りと雖も尚お存す。蓋し「廢帝」字の如きは是れなり。又た誤字の一二は之を正す者有り。人名地名の疑うべき者の如きに至りては、乃ち「恐」字を冠して改む（一、本書中井履軒翁之所選。而今註之題曰標註通語。務探熟語出拠。以詳文意所存。聊欲令読者得繙閱之便。是後学予微衷也（筆者注：「予」は小字）。一、引証諸儒先輩之説。又傍雖野乘陋語。苟足參考者則網羅輯収。以欲博敷語意。此所予為宿志也。一、載人名及地名於欄外。又註釈施小括弧者為原註。所以別新旧也。一、予従事於此書也（筆者注：「予」は小字）。率爾起業。未遑潜心讎校。恐遺漏誤謬亦多矣。又有前解者後而略之。読

者諒焉。一、本書有可加訂正者。雖然尚存焉。蓋如廢帝字是也。又有誤字一二正之者。至如人名地名可疑者。乃冠恐字改焉。」とある。

(25) 『通語難語解』の装丁は線装本で、本文の書式も木版本の形式に模している。

(26) 衆議院・参議院編『議院制度七十年史(第11・衆議院議員名鑑)』、大蔵省印刷局、一九六二年、四七頁を参照。

(27) 『明治史料』第六集所収、明治史料研究連絡会、一九五九年に収められている『愛知県会議員名簿』、一四六頁によれば、石黒が県会議員を務めたのは明治二十一年五月から明治二十三年四月までのことである。

(28) 『通語評』の所蔵状況については、注2の井上論考より知見を得た。

(29) 猪飼常吉「敬所先生行状」、『近世名家碑文集』、明治二十六年、二九三〜二九八頁および江木戩「山陽頼先生行状」、『近世名家碑文集』、明治二十六年、一一三〜一一〇頁を参照。

(30) 参考までの述べると、池田四郎次郎『日本詩話叢書』第四卷(文会堂書店、大正九年)所収の猪飼敬所『葛原詩話標記』もわずか数丁しかない。その「解題」によれば、同書は、もともと家蔵の『葛原詩話』に見られた敬所の書き込みを抄出してまとめたもので、書名は敬所の『四書標記』にならった、と言う。注29の「敬所先生行状」には、敬所は、本を読んで間違っていると思うと、たとえ人の本であつても、訂正を書き込んで批評せずにはいられない質だった、と記されている。

(31) すでに述べたように、読点、返り点、履軒の注は、天保一四年の刊本にすでに見られる。ちなみに大阪大学附属図書館懷徳堂文庫が所蔵する履軒の自筆本『通語』には、句点と履軒の注は見られるが、返り点は見られない。一方、袖園の自筆書写本には、返り点が付されており、その冒頭には早野橋隧の天保二年の「通語序」および清水中洲の天保一三年の「刻通語序」が見られることから、この袖園の書写本が天保一四年の刊本の底本となったと考えられる。

(32) 猪飼敬所『通語評』(京都大学附属図書館所蔵)および頼山陽『日本外史』「源

氏下」、木崎愛吉・頼成一共編『頼山陽全書』所収、頼山陽先生遺跡顕彰会、昭和六年、一一二頁を参照。

(33) 頼山陽『日本外史』「源氏後記」(前掲)、一四九〜一五〇頁を参照。

(34) 「東語上」には、「野史氏曰く、初め義朝其の父を弑して、並びに九弟を殺す。又た平治の乱を更て、誅滅して殆ど尽き、頼朝の起に及んで、存する者幾どを亡す。頼朝又た世父二、弟二、従兄弟三、従兄弟の子一人を殺す。頼朝死するの後、其の二子、三孫、一弟、二姪も亦た更に相い賊い、以て其の祀を絶つ、悲しいかな(野史氏曰、初義朝弑其父、並殺九弟。又更平治之乱、誅滅殆尽。及頼朝起、存者亡幾。頼朝又殺世父二、弟二、従兄弟三、従兄弟之子一人。頼朝死之後、其二子、三孫、一弟、二姪亦更相賊、以絶其祀、悲夫)」とある。

(35) 頼山陽『日本外史』「源氏後記」(前掲)、一五一〜一五二頁を参照。

(36) 井上了「明治における『通語』——南朝正統論者としての中井履軒——」(前掲)、七三〜七五頁を参照。

(37) 山中浩之「中井履軒の思想」(前掲)、二六三頁、二六七頁を参照。

久米裕子(くめ・ひろこ)

一九六八年生まれ。京都産業大学文化学部教授。専門は中国思想。共著に『懷徳堂知識人の学問と生』(懷徳堂記念会編、和泉書院、二〇〇四年九月)、『教養としての中国古典』(湯浅邦弘編著、ミネルヴァ書房、二〇一八年四月)、主要論文に「寧波の土地の記憶…南宋末の思想家、黄震の足跡」(『京都産業大学論集人文科学系列』第四五号、二〇一二年三月)など。

